

喜多家住宅の庭園と地域の用水

Kita Garden and Regional Water Ways

TSUBA Takahiro

鐔 隆弘



図-1 土縁からの眺め

1. はじめに

2020年に、国指定の重要文化財である喜多家住宅が野々市市に寄贈された。建物は、明治24年（1891）の野々市大火でほとんどが焼失した後に、金沢市材木町の醤油屋田井屋惣兵衛の主屋を買い求めて同年の11月に移築し完成したものである。通りに面して間口7間半もある大型の町家で、元は文政から天保期（1818～1843）頃に建てられたものとされている。座敷に面する庭園も座敷から眺めたり、座敷を中心に歩き回ったりできる形を持つことから、建物移築と同時期に作庭されたと思われる。庭園の大きな特徴としては、地域を流れる農業用水を引き込んでいること、またそ

れを庭園の泉水として利用していること、庭園に入れる前に蔵前において洗い場の水として活用していること、庭園内に流した後に酒造の作業場で使用していることである。それが庭園形態にどのような関係しているのか現況をもとに考察を行った。

2. 庭園形態の特徴と現況

昭和54年（1979）に作庭家である野村勘治氏により実測調査が行われ、作成された平面図が野々市市に所蔵されている。当時より植栽に若干の変更が加えられ、その現況は次のようである（図12）。この庭は屋敷の主庭として客座敷の北側に広がる。座敷前の土縁から眺められる部分で東西15.6メートル、南北16.0メートル、広さ192.2平方メートルある。中央には池、北西に築山が設えられた池泉回遊式の庭園であり、東側に茶室前の露地が広がる。土縁からは見えないが、座敷西側の旅客用便所・風呂西側に幅2メートルほどの庭園のしつらが広がる。

池には二筋の水路が流れ込む。建物西側の狭い部分を通って南西側から細いものが、西側から太いものが入る。合流する部分が広く作られ、池に見立てた形となっている。南西側の細い水路には南側道路側溝に水の取り入れ口がある。道路の排水側溝であり、普段は

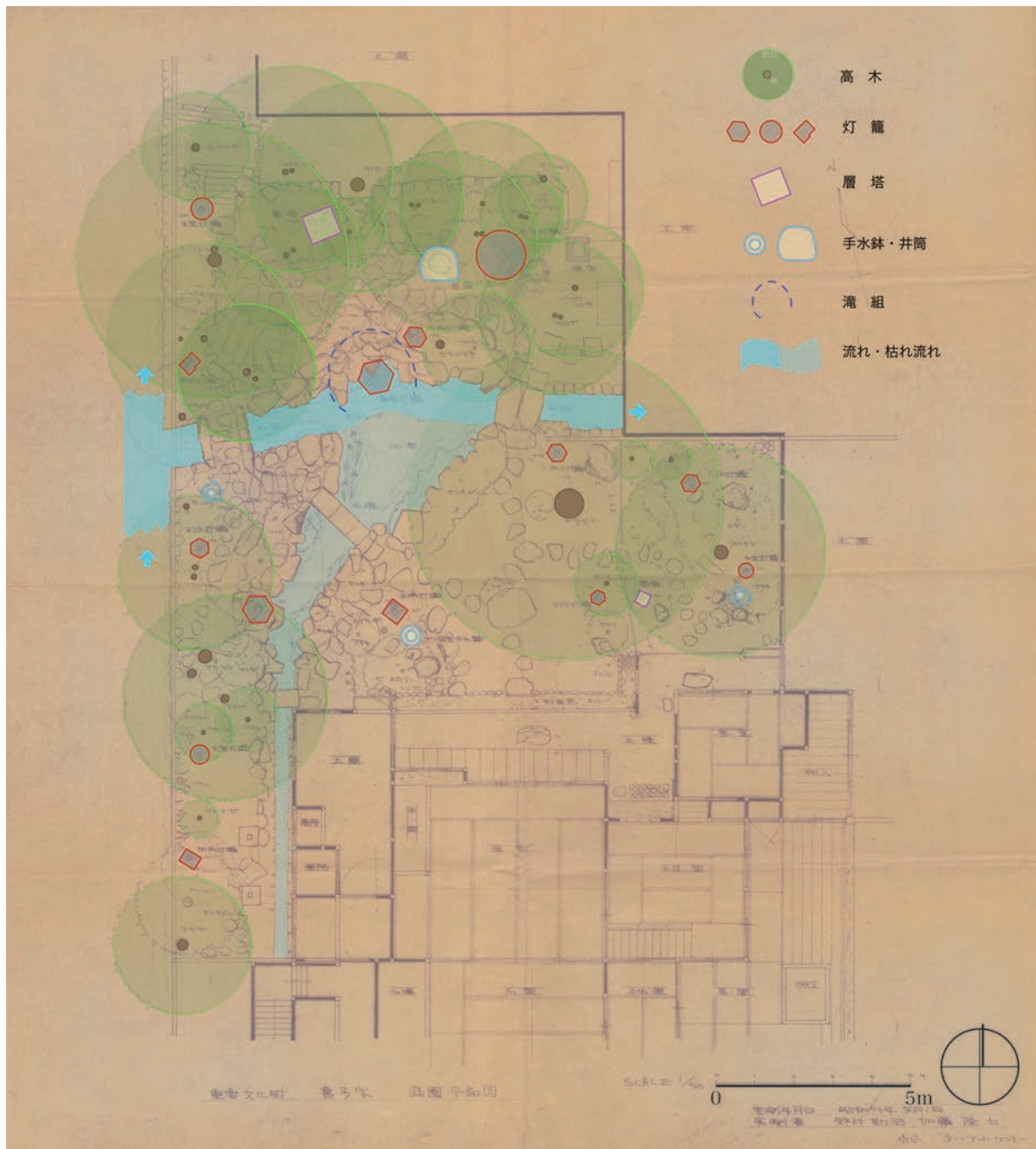


図-2 庭園の現況（元図「喜多家庭園平面図」野村勘治・加藤隆七 作図 野々市市所有）

水流が無く水が流れ込みにくい形態となっていることが確認できた。前所有者からの伝聞によると50年以上にわたり水の流れはない。現状では水路及び池部分には土砂が堆積し、草が繁茂しかけた状態である。西側からの太い水路は、敷地西側に沿って南から北に流れる農業用水を角落としての堰により分岐したものである。現状では用水の水位が高い際に、水深3〜4センチメートル程度で庭園内を流れる。水路北側の石組や雪見灯籠の脚部分の水流による変色が、それよりは15センチメートルほど高いことや、水路が流れ込む作業場屋内で作業に使用されていたことから、かつては多量の水が流れていたものと思



図-4 農業用水に設けられた角とし堰

る表情豊かなものが見え、太い水路にかかる西側の石橋の袖は、自然石の表情が見えるものとなっており、この正面石組と連続した眺めを作っている。また中央部に置かれた雪見灯籠に隠れているが、滝組が見られる。錆びた鉄管が天端の石の間に設けられていることから、かつては水を落としていた



図-3 二つの流れの合流部（手前）と築山の石組

われる。石組はこれらの二筋の水路の北側に据えられている。手前の細い水路にかかる橋の西側には、土縁前に置かれた蹲の背景を作るように大きな石が据えられている。正面の築山部分には様々な色の石が組まれている。使われている石の多くは丸みを帯びた優しいものながら、侵食の跡を見せる表情豊かなものが見え、太い水路にかかる西側の石橋の袖は、自然石の表情が見えるものとなっており、この正面石組と連続した眺めを作っている。また中央部に置かれた雪見灯籠に隠れているが、滝組が見られる。錆びた鉄管が天端の石の間に設けられていることから、かつては水を落としていた

庭内の回遊路は、土縁を出て左回りに巡ると、景色の変化が大きく、右回りより楽しめる作りとなっている。沓脱石から正面の滝を眺めながら北側に向かって飛石を伝い石橋を渡る。渡る際に西側の石橋を望む。石組により深い谷としての景色が作られており、山に踏み込む雰囲気を見



図-6 細い流れに掛かる井戸側を利用した石橋



図-5 滝組上部 鉄管の露出 コインは100円玉



図-8 築山から座敷に向けての眺め

座敷からの眺めにおいては、手前の蹲、細い水路対岸の石組、奥の南側に対しての眺めでは、旅客用便所・風呂の庭園空間が細長く伸びており、奥行きが深い眺めを呈している。石橋を二つ渡って、土縁前に戻る道行は天上と俗世の遠さを強調しているように作られている。

この庭の特徴として、数多くの灯籠が置かれていた点があげられる。自然石の形をそのまま使ったもの、時代の流行りであったと言われる小屋型のものほか、配置について



図-7 東の石橋より見る西側の石橋

せている。渡った先には景石が据えられ、手前の平坦な俗世から神聖な山の世界に入るような様子が演出されている。築山の石段を登ると層塔のある高みに至る。振り返ると天上から俗世を見下ろすように、池の水面越しに座敷を望む形となる。植栽も大きな木々が茂り、築山の上ながら囲繞感の強い空間となっている。この場所からの

の築山の石組、築山後の高木、土蔵の化粧壁が重なり、奥行きが深い眺めを呈している。築山付近はこれら高木により暗い雰囲気、池より手前の平坦部は開けた明るい雰囲気がある。この明るさの対比も奥行きを強調する仕掛けの一部となっている。

東側は茶室に至る露地となっている。土縁の中には荒天でも使用できる腰掛待合がしつ



図-10 細い流れの西側から茶庭に向けての眺め



図-9 細い流れの西側の石組

は滝組を隠すように置かれたものや座敷から見えにくい位置に置かれたもの、とても近い距離に置かれた二つのものも見られる。中には崩れたものもあり、扱い方は課題と言える。

植栽については、昭和54年（1979）の調査において記録された高木、中低木のうち茶室前の複数のスギやサワラ、築山周辺のモミジ、ゴヨウマツ、旅客用便所前のツバキ、アカマツ、サンゴジュが撤去されているが、多くはそのまま生育している。庭園外になるが北東部の木戸を出た先に大きなクスノキは、土蔵と共に庭園の緑濃い背景となっていたが、土蔵と水路護岸の保全のため令和3年（2021）に伐採撤去された。このような状態ながらも築山に生育する常緑樹は眺めの背景をしっかりと形成している一方、成長しすぎて管理しにくい状態にあるとも言える。手前の平庭には、池の縁に沿ってサツキツツジが繁茂している。座敷から見ると池、築山の石組を隠すほどの大きさに生育しており、切り戻しなど修正が必要な状態となっている。

3. 作庭の工夫について

（1）二つの流れ

喜多家の立地するこの地域の地形は、南から北向きに低くなっている。また西から東向きに低くなっている。一つの勾配として座敷の方が高く、庭園奥に向かって低くなっている。もう一つの勾配として、座敷から見て左が高く右が低くなっている。この庭園に流れを導入しようとした場合、素直な形とすれば座敷の方から庭園奥に向かって流れる形か、庭園左の板塀側から作業場に向かって流れる形となる。流れを一本入れようとした場合、南から北に流れる、つまり座敷から見ると手前から逃げてゆく形態となり、水の見え方としては物足りないものとなる。またもう一つの西から東に向かう勾

配に沿った流れとする場合、流れを横から見ることとなり迫力に欠ける。単調さを避けて段差を設けるとしても、段差は南から北に下る勾配に沿ってやや北、つまり庭園の奥を向いてしまっていて見にくいものとなってしまふ。この解決策の一つとして、流れを二本設け、それらの合流部分を池のように広くし、流れとは異なる形態とすることで、一本では単純、単調となりがちな見え方を複雑なものとしている。

この合流部分を作ることで、庭園全体の見え方に奥行きが生まれている。合流部分の左手は、池状の水面に伸びる出島として奥の水面を隠し、この広がりを見せないことでさらに広く感じさせる仕掛けとなっている。またこの出島の手前側に迫力ある石組が設けられている。奥の築山の護岸と重なり、深い眺めを形成している。眺めだけでなく、回遊路の道行は細い流れと太い流れの二つを渡ること、歩むものに築山の深さを感じさせる作りとなっている。

（2）流れの始まり

南からの流れである細い流れは、建物の西側に沿って北に向かって流れ、座敷から北に向いて庭を眺める者にとっては、視界の左端から徐々に見えるように作られている。庭園の景色に突然と現れる



図-11 細い流れの流入箇所



図-13 太い流れに掛かる石橋と橋台



図-12 流れの終わり部分（奥右は袖壁）

のではない点に作庭者の意図が感じられる。また、太い流れである西からの流れは、西側の板塀下から引き込まれている。座敷から眺めた場合、出島の向こうに重なる築山の間から流れるように作られている。築山の手前に水の取入口を作ることでも可能であるが、これでは塀の足元にぽっかりと穴が空き、庭園の外気配も入り込んでしまつて、設えとしてはみつともないものとなる。築山の一部を掘割にすることで流れの始まりが見えず、深山から流れてくるような形の演出となる工夫が見える。

（3）流れの終わり

庭園を流れた水は、東側の作業場の壁下へ流れ込む。この仕舞方

は難しい部分である。この庭園の場合、建物から突き出した袖壁と高木植栽により、建物内へ流れ込む様子を隠している。流れの終わりである端部を見せないということは、意匠的には「終わっていない」ことを意味している。まだまだ先に続く長い流れの演出といえる。また、袖壁に隠された部分があるので、庭園空間と建物の関係が曖昧なものとなり、限られた空間ながら広がりを感じさせる形態となっている。袖壁の存在は庭園全体の見え方に大きく影響している。

（4）水音

庭内の二つの流れの中には、段差はないが水音が響いている。音源は庭の外にある。西側の板塀の外側に沿って流れる用水から、庭内に水を引き込む箇所角落としの堰が設けられており、そこで発生した水音が太い流れに沿って庭内に伝わってきている。築山の中で太い流れに掛かる橋は石でできており、また橋を支える橋台も石積となっている。硬いものでできたトンネル状の橋下の空間で水音が反響して、庭内に伝わる仕組みとなっている。

4. 作庭計画に関する考察

庭園における流れ設置の工夫について眺めてきた。喜多家の場合は、庭園での活用前後に屋敷の内部において活用している点が大きな特徴と言える。建物の内外で連続して水が利用されるこの形態は、作庭家が庭園だけの形態を考えて実現できるものではなく、また建物だけの使い勝手を考えて作られるものではない。建物におけるさまざまな機能の配置を把握した上で建物と庭園が作られないと、実現できるものではない。喜多家は明治半ばに元の建物を火災

で失い、酒造業務継続のため早急な再建のために金沢にある建物を求めた。新築でなく移築を選んだことは、急いでいたことを示していると考えられる。この土地に移築する際に、地域の地形を把握しながら、近隣を流れる水をどのように活用するか、計画段階での俯瞰的な検討があったと思われる。急ぐ中、このような計画がなされたであろうことは、評価に値する。分業が進んだ現代ではほとんど見られないが、地域、敷地、庭園、建物の全てについて差配できる能力を持った人物がいたと思われる。

建物が移築された年代は明治24年（1891）と明らかであるが、作庭の時期は明確となっていない。しかしながら、喜多家においては地域の広い範囲の地勢を活かした敷地計画、建築計画があり、庭園では水の流れに代表される細かな魅力に反映されている。このことから、作庭の時期は、建物移築とほぼ同じ時期だったと推測される。

5. 終わりに

野々市市は、国指定重要文化財である喜多家住宅の寄贈を受け、令和3年度にその保存活用計画をまとめた。その中で、住宅建物の環境保全計画を作成するにあたり、敷地内の屋外空間について調査を行った。その際、地域の用水の状況を見て回る機会があり、その様子から見た目では気づきにくい緩やかな地勢を感じ取ることができた。喜多家の場合、庭に用水の水を引き込んでいたことと同時に、建物内においても水を利用していたからこそ、地域の地勢と建物及び庭園形態の関係性に気づくことができた。庭園を扱う際には、このような地域的な背景までは中々語られることは少ないように思う。喜多家の位置する本町周辺には、用水を取り入れた敷地がいくつかあり、それらがどのように利用されているか気になるところであり、今後調査を進めることとしたい。今回の調査検討を通して、

敷地内の庭園の形態、建物との関係性について特性を把握するには、敷地内で完結せず地域的な視点をもって眺めることが重要であることを認識した。

参考文献

『重要文化財 喜多家住宅保存活用計画』

野々市市教育文化部文化課・令和4年3月

（つば・たかひろ 環境デザイン専攻／

ランドスケープ・アーキテクチュア）

（二〇二二年十一月八日 受理）

